

公益の風 #60



東北公益文科大学大学院 修士課程修了

佐藤 篤子

私は酒田市職員としての業務と並行して東北公益文科大学大学院に2年間在籍しました。市職員として比較的長く子育て支援部署での勤務を経験し、その中で子ども達のライフステージにおいて切れ目のない相談支援を心掛けていながらも、高校生に対する支援体制がまだ十分ではないと日々感じていました。そして、近年よく耳にする「生きづらさ」を高校生も抱えているのではないかと推測しました。

そのため、子どもたちの中でも高校生に着目し、どういったことに困り、生きづらさを抱えているのかを明らかにしたいと考えました。

高校生のしんどさに寄り添うということ —スクールソーシャルワーカーの視点から—

かになりたいと考えました。さらに、学校を基盤として人と環境の双方に働きかけるスクールソーシャルワークによるアプローチに着目し、自分らしい人生を歩んでいくための高校生のニーズに沿った支援の方法を考察することにしました。

こうしたことから、生きづらさを抱える高校生のニーズを誰がどのようにキャッチし、必要な支援につなげるのかを明らかにすることを目的として研究に着手しました。研究の方法として、高校をフィールドとしてスクールソーシャルワークを積極的に展開している方々へのインタビュー調査を行い、貴重な現場の声と実態を明らかにすることができました。

分析の結果、生きづらさとは非常に過酷な環境で生まれること、また周囲の人による「何か困っている」という気づきを起点としたニーズキャッチにより支援が行われていることが明らかにになりました。さらに、スクールソーシャルワーカーや教員など周囲の大人との対話を複数回重ねることで、高校生の言動に良い変化が生まれることが明らかになりました。

ました。

2022年の民法改正により、高校生は在学中に大人の仲間入りをすることとなりました。保護者に守られる立場でありながら、成人としての責任を背負う立場という対峙したライフステージであり、高校生はとても複雑な立場にいます。そうした立場にある生きづらさを抱える高校生のニーズをキャッチし、必要な支援につなげることは、生活基盤を整え、自分を尊重した人生を送るために非常に重要なことです。

生きづらさを抱える高校生に共通して言えることは、他人との関係を通して生きる力を取り戻すことができたこと、自分自身を受け入れるという過程を通して自ら生活していく力を獲得することができたりと、単に支援を受けるだけの脆弱な存在ではないということです。私は、自身の研究を通して人間の持つ秘めた力の大き

さを痛感しました。

入学当初、私は別のチームで研究計画を立てていました。しかし、興味のある授業を全て受講し、その中のある授業を通して「生きづらさ」というものに着目することができました。様々な視点から研究における着想を得ることができるといふ点においても、幅広い学問領域の授業を展開している東北公益文科大学大学院で研究に取り組むことは大きな意義があったと思います。今後、地域に根ざした大学院での学びと研究で得た知見を活かし公務に励んでいきたいと思っています。



大学院授業を通じて企画・運営した「朝日中学校地域語り合い交流編」の様子